

モウ・マダの意味と用法

言語学・応用言語学専門分野

1LT09115N

2009（平成 21）年入学

平山 祐美

2013（平成 25）年 1 月提出

要旨

本論文では、モウ・マダの意味と用法について考察した。

モウを用いた文には、単に完了の事実を述べたものがある一方で、仕事をしている人が「もう 3 時か」という場合は、完了の意味に加えて状態の変化が起こるのが早いと感じる心理が話し手の中にある。またマダを用いた文には、単に未完了を表すものがある一方で、「やってもやってもまだ宿題が終わらない」などでは、未完了の意味に加えて状態の変化が起こるのが遅いと感じる心理がある。

そこで本稿ではモウ・マダはどのようなときに完了・未完了を表して、どのようなときに完了・未完了の意味に加えて状態の移行が起こるのが早い・遅いと感じる心理を表すのかという問いを立てた。

この問いに対する答えとして本研究では、モウ・マダは、状態の移行があるのを前提として、完了・未完了の意味を持ち、さらに話し手の、状態が移行している時点の予想がなければ、その移行が起こるのが早い・遅いと感じる心理は表されないと主張した。

1. はじめに	1
2. 先行研究	2
2.1. 三枝 (1986)	2
2.2. 池田 (1999)	2
2.3. 池田 (2000)	3
3. 主張	5
4. 状態の移行	6
4.1. モウ (動詞ル形肯定文以外)	6
4.2. モウ (動詞ル形肯定文)	9
4.3. マダ	9
5. 完了・未完了	11
5.1. 完了のモウ	11
5.1.1. 動詞ル形肯定文以外	11
5.1.2. 動詞ル形肯定文	13
5.2. 未完了のマダ	14
6. 状態が移行するまでの早さ・遅さを感じる心理	17
6.1. 時間軸と状態変化の予想	17
6.2. 時間の経過を早いと感じるモウ	18
6.2.1. 動詞ル形文以外	18
6.2.2. 動詞ル形文	21
6.3. 時間の経過を遅いと感じるマダ	22
7. まとめ	25
参考文献	26

1. はじめに

日本語のモウは(1a)のように、状態が移行してある状態に至ったことや動作が終了したという完了の意味を持つ。またマダは(1b)のように、状態がある時点に達していないことや動作が終わっていないという未完了の意味を持つ。

しかしさらに、完了・未完了の意味に加えて、モウ・マダは以下の(2)を見ればわかるように、状態の移行が起こるのが早い・遅いという話し手の心理を反映するときがある。

(1)のモウを含む例では、a は「もう投票に行った」という動作の単なる完了、b は「まだ提出していません」ということから、提出するという動作の単なる未完了を表すと考えられる。また、(2)のモウ・マダを含む例では、a では「もう帰る」という表現で、完了に加えて「帰る」なんて早すぎる、という心理、b では「まだ受からない」という未完了に加えて、受からないことに対する発話者の何らかの心理も表されているようである。

- (1) a. A: 「選挙の投票に行かない？」
 B: 「私はもう行ったよ」
 b. 締め切りまで1カ月あるので、報告書はまだ提出していません。
- (2) a. (5分前にパーティに来た人が帰るのを見て) あの人もう帰るんだ。
 b. (10年間司法試験の勉強をしている人を見て) まだあの人は受からないかあ。

このように、モウ・マダには完了・未完了を表す場合と、さらにその意味に加えて状態の移行が起こるのが早い・遅いと感じる心理を表す場合がある。そこで本稿では、以下のような問題を扱う。

- (3) モウ・マダはどのようなときに完了・未完了を表して、どのようなときに完了・未完了の意味に加えて状態の移行が起こるのが早い・遅いと感じる心理を表すのか。

本論文の構成は以下のようになっている。初めに、2章で本稿の主張を述べた後、3章でモウとマダを扱う前提条件となる状態の移行について考察する。次に、5章で完了のモウ、未完了のマダを扱う。続く6章で状態の変化と時間軸の関係について説明し、状態の変化が起こるのが早いという心理を生じさせるモウ、遅いという心理を生じさせるマダを扱う。

2. 先行研究

文法書ではモウ・マダの意味と用法について考察されている。『現代副詞用法辞典』、『現代日本語文法』、『日本語文法ハンドブック』などでは、様々な用法があげられているが、なぜその用法が生じるのかは明確でない。

2.1. 三枝 (1986)

三枝 (1986) では、日本語学習者の誤用研究からモウ・マダの意味を明らかにしている。(4)の例では b が正しい答えであるにもかかわらず、日本語学習者には a を選ぶ人が多く見られる。(4)の誤答は、状態の移行という観点から説明されている。答えとなる B の a では「入らない」状態から「入る」状態への移行、b では「入る」状態から「入らない」状態への移行が考えられるとされている。

三枝 (1983) の中ではきちんと定義されていないが、この考えを基にマダが状態の移行前に発話時を持つとすると、「今入る状態である」と述べている「まだ入ります」という b が正しいことになる。

(4) A : 荷物がたくさんあるんですが。

B : a. この箱はまだ入りませんよ。

b. この箱はまだ入りますよ。

(三枝 1986: 51,(2))

また三枝は、モウ・マダは対立概念を含んだ状態の進行を前提としてしていると述べている。

「もう大人だ」といった場合、「大人である」状態と「大人でない」状態の対立概念を想定することができるとしている。しかし(5)の文は「3時じゃない」状態の対立概念が想定しにくいので不自然な文としている一方で、(6)の文は自然な文として受け止められることが説明できていないと三枝自身が述べている。

(5) ??もう3時じゃない。

(6) まだ3時じゃない。

2.2. 池田 (1999)

池田 (1999) では、(7)(8)のような状態性述語文ではモウは発話時が状態の移行後にあるとき、マダは発話時が状態の移行前にあるときに用いることができるとされている。

(7) もう水が半分もある。 (池田 1999: 25,(34))

(8) まだ水が半分しかない。 (池田 1999: 26,(35))

一方、動作性述語文の場合は、(9)の「もう～する」、(10)の「まだ～しない」のときは発話時が単一事象の開始限界前にあるとされている。(11)の「もう～しない」は発話時が繰り返し事象の終了限界後、(12)の「まだ～する」は発話時が繰り返し事象の終了限界前であることを示すとされている。

単一事象の開始限界前

(9) a. もうおばあちゃん死ぬよ (cf.池田 1999: 30,(60))

b. もう食べる (池田 1999: 31,(63))

(10) a. まだ食べない (池田 1999: 31,(66))

b. まだ座らない (池田 1999: 31,(68))

繰り返し事象の終了限界後

(11) a. もう食べない (池田 1999: 31,(67))

b. もう座らない (池田 1999: 31,(68))

繰り返し事象の終了限界前

(12) a. まだちゃんと動く (cf.池田 1999: 30,(61))

b. まだ座る (池田 1999: 31,(65))

しかしこれらの例では、同じ動詞が使われているが単一事象と繰り返し事象で発話時点の違いが出てくることに疑問が残る。モウ・マダの意味と状態の移行という概念を新たに定義しなおして説明を試みる必要があるだろう。

2.3. 池田 (2000)

池田 (2000) では、特に状態の移行前を表すモウについて考察されている。状態の移行前を表すモウが用いられた文では、モウは継続している状態の打ち切りというニュアンスをもつとしている。(13)のような動作性述語文の例では、状態継続を打ち切るための手段が述語によって示され、(14)のようにカッコ内の意味がモウによって示される意味としている。

(13) a. あいつはもう死ぬ。 (池田 2000: 50,(11))

b. 僕はもう寝る。 (池田 2000: 50,(12))

- (14) a. あいつはもう (すぐ/じき) 死ぬ。 (池田 2000: 50,(13))
b. 僕はもう (今から/これから) 寝る。 (池田 2000: 50,(14))

一方(15)のような例はモウが状態性述語と共起しながら、状態の移行以後を表さない例とされている。そして、状態性述語文ではモウが状態継続の打ち切りまでの必要量を示すとされている。

- (15) a. 水がもう少し足りない。 (池田 2000: 50,(20))
b. 完成までもう一、二年時間がかかる。 (池田 2000: 50,(21))

しかし、この指摘ではモウが状態性述語と共起する場合、何をもって状態の移行以後を表さないとしているかが判然としない。また、「水がもう、少し足りない」というようにモウと数量詞の間にポーズが置かれる例を考察対象外としながら、モウが「もう少し」「もう一、二時間」のように数量詞を伴う場合と、「もう寝る」のようにモウが述語にかかる場合とを並行的に扱っている点にも大きな問題があると思われる。そこで、本論文ではモウが数量詞を伴う例は扱わず、モウが述語にかかる場合の例を対象にしていく。

3. 主張

本論文では、(3)の問題提起に対して、以下のような主張をする。

- (16) モウ・マダは、状態の移行があるのを前提として、完了・未完了の意味を持つ。さらに話し手の、状態が移行している時点の予想がなければ、その移行が起こるのが早い・遅いと感じる心理は表されない。

本論文の構成は以下のようになっている。初めに、4章でモウとマダを使う前提条件となる状態の移行について考察する。次に、5章で完了のモウ、未完了のマダを扱う。続く6章で早いと感じる心理を生じさせるモウ、遅いと感じる心理を生じさせるマダを見ていく。

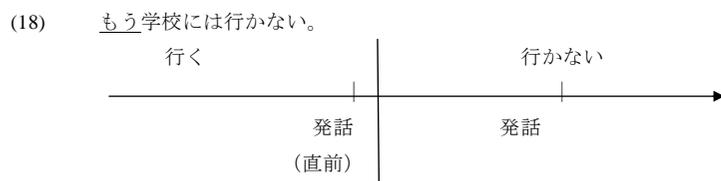
4. 状態の移行

4.1. モウ（動詞ル形肯定文以外）

モウは状態の移行を前提として用いられ、動詞ル形肯定文以外では状態の移行直前もしくは移行後に発話時点がある。例えば、(17)の「もう3時だ。」では「3時ではない」状態から「3時である」状態へと状態の移行がある。発話時点は3時になる直前、もしくは3時になった後にあるので、たとえば時計をずっと見ている状況や、朝から仕事をしていて時計を見た状況での「もう3時だ。」という表現は、発話時が2時57分や3時5分のどちらでも使われる。以下では真ん中の長い縦線が、状態の移行を示す境界を示す。



動詞ル形否定文でも同様である。「もう学校には行かない」という表現では、「行く」状態から「行かない」状態への状態の移行があり、発話時点は「行く」状態の直前、もしくはその後にある。そのため、たとえば明日から学校には行かないという移行直前での発話や、不登校で学校に行かない状態が続いている子供が「もう行かない」という移行後の発話のどちらでも使える。



文がテイル形やタ形的时候には、モウを使う場合、発話時点が状態変化の直前に来られない。(19a)では映画を見るという行為が完了しているため、映画を見るという直前の解釈はできない。タ形でも同様であり、(20a)では届けるという行為が完了しているため、状態が移行する直前という解釈はできない。

- (19) a. もうあの映画は見ている。
b. もう電車は来ている。

- (20) a. もう手紙は届けた。
b. もうクリスマスの飾りは全て撤去した。

反対に、以下の(21)のような例では、現実世界では状態の移行が考えられにくいためモウを用いることができない。(21a)はモウを用いているため、「高い」状態から「低い」状態への移行が考えられるが、人間が成長する過程でそのような状態の変化は考えにくいため容認性が極めて低くなる。(21b)ではモウを用いているため「古い」状態から「新しい」状態への変化が想定されているが、洋服をリサイクルでもしない限りそのような変化をすることは考えられにくく、容認されにくい。このように、モウ・マダの文には物事の状態の移行が考えられるかどうかの文の容認性にかかわっており、状態の移行が想定されなければ容認されない。

- (21) a. *僕はもう身長が低い。(*高い→低い)
b. *この洋服は買ったばかりでもう新しい。(*古い→新しい)
c. *これは私にとってもう知らない世界だ。(*知っている世界→知らない世界)
d. *生まれてからのことを振り返って、おばあちゃんは「私はもう若い」と思った。
(*若くない→若い)

(22)のような例は、一般に「背が低い」状態から「背が高い」状態への変化はないため容認されない文となるが、おとぎ話で背が高い状態から背が低い状態へと変化するという状態を考えれば、容認できる文となる。

- (22) (おとぎ話で) 私はもう背が低い。

「もう～ではない」という表現の場合、モウは「～ではない」という述語全体にかかっている。(23a)では中学校を卒業して「中学生ではない」という状態、たとえば高校生の状態に達していると解釈される。モウが「中学生」だけにかかる解釈は一般的にされない。そのため、今小学6年生で、あと少しで中学生になる状態ではないという解釈はされない。(23b)(23c)も同様である¹。

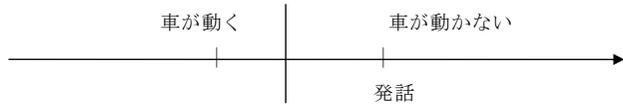
¹一方で(1)の例ではモウが述語全体にかかり、小学校を卒業して既に小学生でという状態ではないという解釈ができるが、モウが小学生だけにかかり小学生になる直前にいるという解釈もできる。後者の解釈はたとえば子どもが小学生になるまでにまだ時間があるが、子どもがどうしてもランドセルを欲しがるので買ってあげたとき、母親が他人に対して「すぐに小学生になるわけではないのですが」という意味で用いることができる。この場合は(2)のように「もう小学生で」という埋め込み節の中でモウが小学生にかかっていることになり、容認される文となる。

- (23) a. もう中学生ではない。(中学校を卒業して、中学生ではない状態に達している)



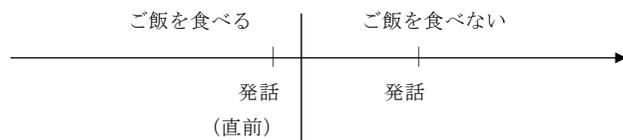
- b. *もう中学生ではない。(中学生になる直前の状態にいるわけではない)

- (24) a. 車はもう動かない。(車が動かないという状況に達している)



- b. *車はもう動かない。(車が動くようになるという状態の直前にいるわけではない)

- (25) a. 私はもうご飯を食べない。(ご飯を食べないという状況に達している)



- b. *私はもうご飯を食べない。(ご飯を食べるといふ行為の直前にいるわけではない)

次の(26)の例では、モウが用いられているため夢が「かなった」状態から「かなわなかった」状態への変化が考えられ、現実世界ではそのような変化はないため容認されないと予想される。しかしここでは「夢がかなう可能性があった」状態から「夢がかなう可能性がなくなった」という状態への変化があることが考えられるため、実際には容認される文となる。

- (1) もう小学生ではないんですよ。
 (2) [もう小学生で] はない]

- (26) いつの間にかずいぶん歳をとってしまっていて、ふと気づいたときには、夢はもうかなわなかった。

(夢がかなう可能性があった→夢がかなう可能性がなくなった)

4.2. モウ (動詞ル形肯定文)

モウは状態の移行を前提として用いられ、動詞ル形肯定文では状態の移行直前に発話時点がある。(27)の「電車はもう来る」では「電車が来ていない」状態から「電車が来ている」状態への移行が前提としてあり、発話時点は電車が来ているという状態の移行直前にある。

- (27) 電車はもう来る。



- (28) ろうそくの火はもう消える。



(29)の「もう恋はする。」では、「恋はしない」状態から「恋はする」状態へと状態の移行があり、「恋はする」という状態になる直前に発話時点がある。

- (29) もう恋はする。



4.3. マダ

マダは状態の移行を前提として用いられ、状態の移行前に発話時点がある。(30)の「まだ3時だ。」では「3時である」状態から「3時ではない」状態へと状態の移行があり、発話時点は状態の移行前にある。



(31)も同様に、「進出しない」状態から「進出する」状態への状態の移行があり、発話時点は「進出する」状態になる前にある。



(32a)のような例は、「背が高い」状態から「背が低い」状態への移行が考えられにくい
ため、容認されない。(32b)～(32f)も同様である。

- (32) a. *私はまだ背が高い。(*背が高い→背が低い)
b. *彼はまだ卒業だ。(*卒業である→卒業でない)
c. *目的地までまだ近い。(*目的地まで近い→目的地まで遠い)
d. *結婚するにはまだ遅い。(*遅い→早い)
e. *ここでは朝7時にまだ日が昇る。(*朝7時に日が昇る→朝7時に日が昇らない)
f. *結婚してまだ2年になる。(*2年になる→2年にならない)

(33a)の「私はまだ年寄りだ。」では、人間が「年寄りである」状態から「若くなる」状態
への移行は一般に考えられないので非文となるが、おとぎ話で年寄りの状態から若くなる
状況を設定すれば容認できる。(33b)も服が「古い」状態から「新しい」状態へ状態が移行
することは通常考えられないため容認不可となるが、たとえばこれからリサイクルする
という状況を想定すれば容認できる文となる。

- (33) a. (おとぎ話で) 私はまだ年寄りだ。
b. (リサイクルされる前) この服はまだ古い。

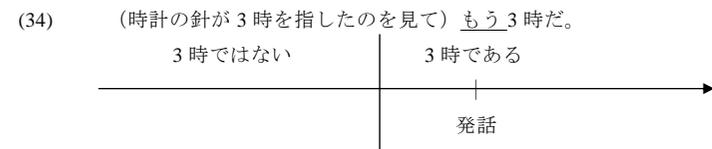
このように、マダの文の場合も、表す事象において状態の移行が認められなければ、容認
されない。

5. 完了・未完了

5.1. 完了のモウ

5.1.1. 動詞ル形肯定文以外

動詞ル形肯定文以外では、モウは述語の表す行為や変化が近いうちに完了されること、
あるいはすでに完了されたことを示す。(34)の「もう3時だ。」という発言では、3時にな
るという結果に注目しており、時計の針が3時を指した瞬間を見て発言する状況で用いら
れる。話し手は3時になったか、それともなっていないかという事実に注目し、文として
は3時になるという「状態の移行」が完了したことを表す表現になっている。

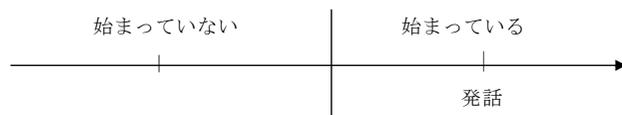


(35)の「もう8人だ。」では、たとえば人を集めていてあの人があれば8人になるという
状況で用いられ、8人になるという「状態の移行」が完了するという解釈になる。話し手
は人数が8人に達することが完了するか、それともならないかという事実に注目している。



(36)の「もう始まった。」では、たとえばパーティに参加したい友人から時間に間に合う
かどうか聞かれたときに、「パーティが始まっていない」からすでに「パーティが始まる」
という状態の移行が完了している状況を、モウを用いて示している。

- (36) A 「太郎の結婚パーティ、今から行ってまだ間に合う？」
 B 「いや、もう始まったよ。」



動詞ル形否定文も同様に状態の移行が完了されたことを示す。(37)はパソコンが壊れて動かなくなったという状態の移行が完了したことを示す。(38)以下も同様に説明される。

- (37) このパソコンは壊れてもう動かない。



- (38) a. もういいよ。
 b. もう将来はフリーターでいいや。
 c. この前建設を始めたあの店はもうある。
 d. もうごみが半分もある。
 e. もうごみがある。
 f. この前つぶれたあの店はもうありません。
 g. あの服装はもう古い。
 h. もう泣かなくていい。
- (39) a. もうどこも痛くない。
 b. もうおかしが半分しか残っていない。
- (40) 電車はもう来ている。
 (41) 電車はもう来ていない。
- (42) a. 宿題はもう終わったの？
 b. 夢はもうかなった。
- (43) a. もう君とは会わない。
 b. 彼はもうあの女を許せないだろう。

状態の移行が完了しない場合には、モウを用いることはできない。以下の例の a では、状態の移行が起り、述語の示す状態にすでになっていることが示されている。(44a)では「大人でない」状態から述語の状態である「大人だ」になっている。(45a)では「閉店では

ない」状態から述語の状態である「閉店だ」の状態に状態が移行している。しかし、b は状態の移行が完了されておらず、完了を表すモウとは共起できなくなっている。

- (44) a. 彼はもう大人だ。
 b. *彼はもう大人には遠い。
- (45) a. もう閉店だ。
 b. *もう閉店まで時間がある。
- (46) a. 余裕がないからもう手遅れだ。
 b. *余裕がだいぶあるから、もう手遅れではない。
- (47) a. 季節はもう春だ。
 b. *季節が春になるまでもうけっこうある。
- (48) a. もう君との関係は終わりだよ。
 b. *もう君との関係は終わりじゃないよ。
- (49) a. 全部見ればもう完璧だ。
 b. *全部見ればもう完璧とは言えない。
- (50) a. もうだめだ。
 b. *もうだめではない。
- (51) a. もうお手上げた。
 b. ?もうお手上げではない。
- (52) a. 自分磨きはもう卒業だ。
 b. ?自分磨きはもう卒業しない。

5.1.2. 動詞ル形肯定文

動詞ル形肯定文では、話し手が状態が移行した結果に注目し、述語の表す行為や変化が近いうちに完了されることを示したい場合にモウを用いる。(53)では、電車が近いうちに来るという予測がモウを使って示されている。(54)も同様に、これからすぐに状態の移行が起こることをモウが示している。

- (53) 電車はもう来る。



- (54) a. 手紙はもう届く。
 b. ろうそくの火はもう消える。

- c. これまで親に禁止されてきたけど、これからはもう恋をする。
- d. 赤ちゃんはもう生まれる。
- e. もう出発するよ。

(55)の「そんな昔のことは、もう言わないことにする。」では、発話時点ではまだ言っている状況にあるが、モウを用いることで、言っている状況から言わない状況への移行を完了するという意思を表す。

(55) そんな昔のことは、もう言わないことにする。

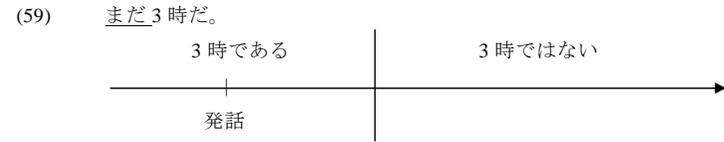


以下では、状態の移行が完了していないために、モウが用いられない例を示す。以下の例では、状態の移行が起り述語の示す状態にすでになっていることが a で示されている。(56a)では「着かない」状態から、述語の状態である「着く」という状態へと移行が完了している。(57a)では「食べない」状態から述語の状態である「食べる」へと状態の移行が完了している。b は状態の移行が完了されておらず、完了を表すモウとは共起できなくなっている。

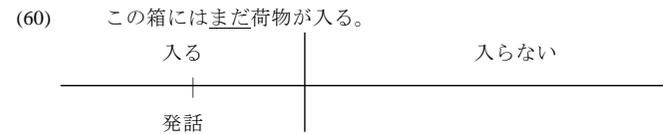
- (56) a. 彼はもう着くだろう。
- b. *彼はだいぶ時間がたってからもう着くだろう。
- (57) a. ダイエットしてるけど、もうケーキを食べる。
- b. *ダイエットしてるけど、もういつかケーキを食べる。
- (58) a. 小包はもう届く。
- b. *小包はあと 10 時間でもう届く。

5.2. 未完了のマダ

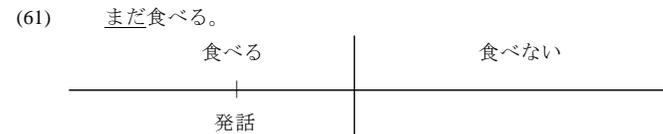
発話時点がある動作や状態の移行前にあり、これまでの状態が継続していることを示したい場合に、マダを用いる。(59)の「まだ3時だ。」では「3時である」という状態から「まだ3時ではない」という状態への移行がまだ完了していないことを示している。これはたとえば入場時間の制限がある会場で、急いで走って来ている人に向かって、今はぎりぎり3時の状態だから間に合うという場面で用いることができる。



(60)の「この箱にはまだ荷物が入る。」では「入る」状態から「入らない」状態への移行が完了していないのでマダが用いられている。



(61)の「まだ食べる。」では、「食べる」状態から「食べない」状態に移行が完了していないため、マダが用いられている。



(62)の「機械はまだ動く。」という表現では、「動く」状態から「動かない」状態に移行が完了していないということをマダが表す。



(63)の「まだ社長だ。」では「社長である」状態から「社長ではない」状態に移行が完了していないという状況をマダが示している。

(63) まだ社長だ。



以下も同様に説明される。

- (64) a. まだ子供だ。
 b. 彼はまだ現役だ。
 c. 季節はまだ冬だ。
 d. まだ試験前なので、参考書をひらいてもかまいません。
 e. 太郎はまだ10歳だ。
- (65) これは私にとってまだ知らない世界だ。

以下の例では、aで述語の状態に移行が完了されていないことを示す。bは状態の移行が完了されており、未完了を表すマダとは共起できなくなっている例である。

- (66) a. 私はまだ男性と付き合ったことがない。
 b. *私はまだ男性と付き合ったことがある。
- (67) a. (温めてごはんを柔らかくしようとしているとき) ごはんがまだ固い。
 b. (温めてごはんを柔らかくしようとしているとき) *ごはんがまだ固くない。
- (68) a. (昨夜から徹夜している状況で) 僕は朝7時でもまだ起きていた。
 b. * (昨夜から徹夜している状況で) 僕は朝7時でもまだ寝てしまっていた。
- (69) a. 飛行機はまだ離陸していない。
 b. *飛行機はまだ離陸済みだ。
- (70) a. 水を減らして100mlにしても、これぐらいの砂糖ならまだ水に溶ける。
 b. *水を100mlにすると、これぐらいの砂糖ならまだ水に溶けきれないものが出てくる。
- (71) a. 何度も自殺に失敗したけど、僕はまだ死ぬ。
 b. *何度も自殺に失敗したけど、僕はまだ死んだ。

6. 状態が移行するまでの早さ・遅さを感じる心理

6.1. 時間軸と状態変化の予想

モウ・マダは完了・未完了の意味を持っているが、話し手がある時点での状態を予想しているとき、完了・未完了の意味に加えて、状態の移行を早い・遅いと感じる心理を示す解釈が生じる。

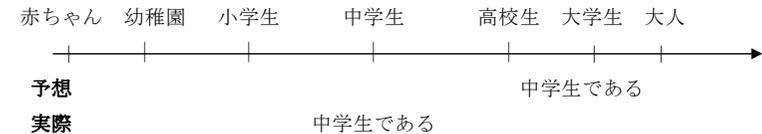
たとえば「太郎はもう中学生だ。」というモウの例では、状態の移行は(72)のように示され、「中学生ではない」状態から「中学生である」状態への移行がある。ここでは「中学生である」状態になる直前にいるか、もしくは中学生になったという完了の意味がモウで示されている。(73)では話し手がある時点で状態が移行されていると予想しているときの図を示している。ここでは赤ちゃんから大人になるまでの時間軸が想定され、その上で「太郎が中学生になる」状態が予想される。実際の発話時点では太郎は中学生になっているが、予想の上ではたとえば太郎が高校生になったくらいに中学生と感ずるだろうという心理がある。そのため、実際のほうが予想よりも時間軸上で早く到達することになり、単なる完了という意味に加えて、早いという心理を示す解釈が生じる。

(72) 太郎はもう中学生だ。

状態の移行



(73) 太郎はもう中学生だ。



「まだ部屋が汚い」というマダの例については、状態の移行を(74)で示している。ここでは「汚い」状態から「きれいな」状態への移行があり、「汚い」状態が継続しており、「きれいな」状態になっていないことがマダで示されている。(75)では話し手がある時点で状態が移行されているという予想を示している。たとえば掃除開始から2時間後には、状態の移行後である「きれいな」状態を予想しているが、実際は今の様子だと4時間後ぐらいにならないときれいな状態にはならない。この場合、実際が予想よりも時間軸上で後

に来るので遅いという心理が生じる。

(74) まだ部屋が汚い。



(75) まだ部屋が汚い。



早さを感じるためには、ある一定の時間幅とその中における状態（の移行の完了・未完了）に対する発話者の予想がなければならない。たとえば、回り続けるルーレットが「もう10周回った」というためには、話し手が開始時点と終了時点を設定して一定の時間幅をとり、その中のどこかに予想時点が設定される必要がある。

(76) ルーレットがもう10周回った。

(77)も一定の時間幅とその中の予想がなければ早さを感じられないという例である。一般的に、一生心臓は動き続けるので一定の時間幅はとらないためモウやマダは使えないが、たとえば3万回心臓が動くことを数えるという状況や、術後一定の時間後までにどのくらい心臓が動くかを測るといった、ある時点を実験する場合、使うことができる表現である。

(77) まだ1万回しか心臓が動いていない。

6.2. 時間の経過を早いと感じるモウ

6.2.1. 動詞ル形文以外

状態の移行があった実際の時点のほうが、ある時点で状態の移行がされているという予想よりも時間軸上で前にある場合、完了の意味に加えて、状態の変化が起こるのが早いという心理が生じ、それがモウで示される。(78)では「卒業ではない」状態から「卒業である」状態に移行することが示されている。発話時点は状態の移行直前、もしくは移行後に

あり「中学生である」状態になることが完了したことが示されている。以下では状態の移行を示す図は省略する。

(79)ではある時点で状態の移行がされているという予想を示している。たとえば、実際の発話時点では入学から3年後に卒業である状態になっているが、今現在その実感はなく入学から3年半後くらいになれば卒業であるという実感が持てるという予想がある。そのため実際のほうが予想よりも時間軸上で前になることになり、早いという心理が生じる。

この用法で使われるモウの文は、前に来る句（文脈）とモウを含む句が逆接でつながれていることが多い。このことも、モウの修飾する句が表している事態が発話者の予想に反しているということの表れである。

(78) この前入学したと思ったら、もう卒業だ。

状態の移行

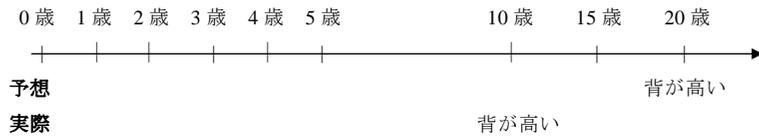


(79) この前入学したと思ったら、もう卒業だ。



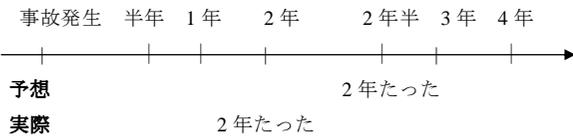
(80)の「あの娘は(10歳なのに)もう背が高い。」では、ある時点で状態の移行がされているという予想が示されている。実際は10歳で状態移行後である「背が高い」状態に至っているが、予想では20歳くらいになって背が高くなるだろうと考えている。そのため、実際のほうが予想よりも時間軸上で前になることになり、早いという心理が生じモウで示されている。

(80) あの娘は(10歳なのに)もう背が高い。



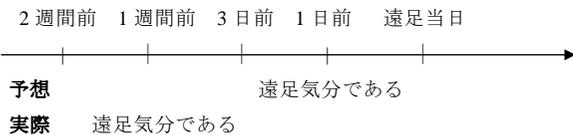
(81)の「あの事故からもう2年か」では、事故があつてから今まであと少しで2年になる、もしくは2年になったばかりであり、話し手がその時間の経過を早いと感じていることがモウで示されている。実際の発話時点では事故から2年が経過しているが、予想では今現在その実感がなく、事故から2年半くらいたつたなければ2年たつたという実感は得られないと考えている。そのため、実際のほうが予想よりも前に来ることになり、早いという心理が生じ、それがモウで示される。

(81) あの事故からもう二年か。



(82)の「1週間前なのに僕はもう遠足気分だ。」では、実際は遠足1週間前に遠足気分になっているが、予想では遠足1日前ぐらいに遠足気分になるのが普通だという考えがある。そのため、時間軸上では実際のほうが予想よりも前に来ることになり、早いと感じる心理が生じ、それがモウで示されている。

(82) 1週間なのに僕はもう遠足気分だ。



(83)(84)も同様である。

- (83) a. 就職したばかりなのに、私はもう結婚だ。
 b. この前入学したと思ったら、彼はもう卒業だ。
 c. 始めたばかりだけど、もうお仕上げだ。
 d. 雪を1度しか見ていないのに、季節はもう春だ。
 e. 暑いと思っていたらもう8月だ。
 f. この前出世したはずなのに、彼はもう部長じゃない。社長だ。
 g. この前工事を始めたばかりなのに、あの店はもうある。
 h. 今年の夏はやったが、あの服装はもう古い。
 i. たった5分掃除しただけだが、部屋はもうきれいだ。
 j. 3時間前にご就寝になったが、天皇はもう起床された。
- (84) 1週間前通つたときは確かに見たのに、あの店はもうありません。

6.2.2. 動詞ル形文

動詞ル形文では、状態の移行があつた実際の時点のほうが、ある時点で状態の移行がされているという予想よりも時間軸上で前にある場合、完了の意味に加えて、状態の移行が早いという心理が生じ、それがモウで示される。(85)では昼食を「食べていない」状態から「食べている」状態への移行が示されており、発話時点は「食べている」状態の直前にあつて完了の意味を示す。

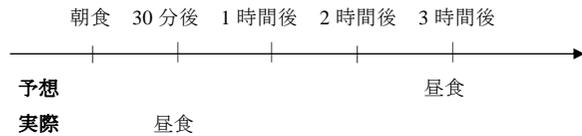
(86)ではある時点で状態が移行されているのを予想していることが示されている。たとえば、実際の発話時点では朝食から30分後に昼食を食べようとしているが、予想では朝食から3時間ぐらいたつてから昼食を食べると考えている。そのため、時間軸上では実際のほうが予想よりも前に来ることになり、早いという心理が生じ、それがモウで示される。

(85) さっき朝食を食べたばかりだけど、もう昼食を食べる。

(朝食を食べたばかりの現在の時点)

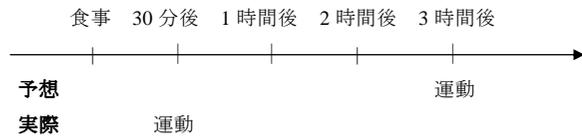


(86) さっき朝食を食べたばかりだけど、もう昼食を食べる。



(87)の「もう運動するの?」では「運動する」の動作主が今は運動していない状況にあるがこれから運動しようとしているのを見て、そんなに早く状態を移行させたいのかという話し手の心理をモウが示している。たとえば、予想では今食事をしたばかりなので運動は3時間後ぐらいにならないとしないと予想しているが、実際は30分後に運動しようとしている。そのため、実際のほうが予想よりも時間軸上で前に来ることになり、早いという心理が生じ、それがモウで示される。(88)も同様である。

(87) 今食事したばかりなのに、もう運動するの?



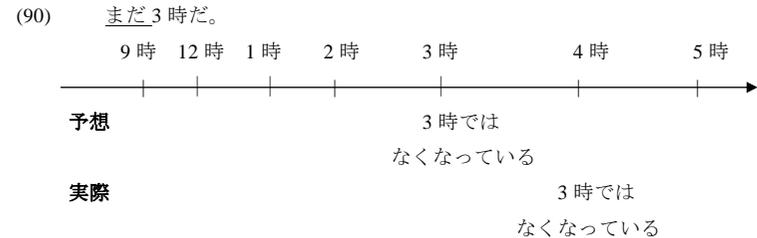
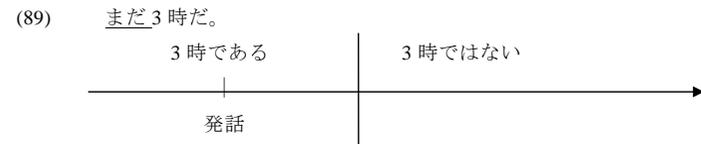
- (88) a. この前事故があったばかりなのに、日本はもう原発に頼る。
 b. まだ20歳だけど、僕はもう死ぬんだ。
 c. 毎日楽しくてあっという間だったが、結婚してもう2年になる。
 d. 今答案を提出したばかりだけど、正しい答えがもう知らされる。

6.3. 時間の経過を遅いと感ずるマダ

マダでは、状態の移行があった実際の時点のほうが、ある時点で状態の移行がされているという予想よりも時間軸上で後にある場合、未完了の意味に加えて、状態の変化が起こるのが遅いという心理が生じ、それがモウで示される。(89)では「3時である」状態から「3時ではない」状態への変化が示され、発話時点は状態の移行前である「3時である」にあり、未完了の意味をマダが示している。

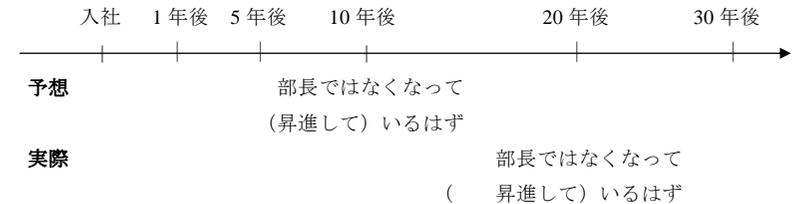
(90)では状態が移行されたと予想していることを示している。たとえば、9時開始の仕事をしています、予想では3時という時間には今現在よりもっと前になっていると考えている。しかし実際に時計を見ると、針は3時を指しているため、時間軸上では実際のほうが

予想よりも後に来ることになり、遅いという心理が生じ、それがマダで示される。



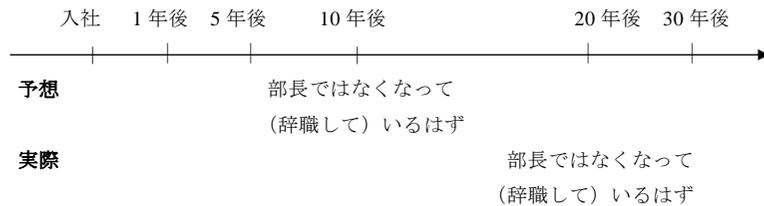
「まだ部長だ。」ではたとえば(91)のように、発話者の予想では状態の移行が完了して10年後には部長でなくなった(昇進した)状態に移行するものとなっていた。ところが、実際の様子からすると、部長でなくなった状態になりえるのは20年後であり、「部長でなくなっている」時点が予想より実際の状況のほうが時間的に後に来るため、移行が遅いという心理を表すことになる。

(91) 健二はまだ部長だ。



また(92)のように、早くやめてくれればいいのにに部長であり続けているという意味で、部長でいる時間を長く感じているという状況も考えられる。この場合も、予想は状態の移行が完了して10年後には部長でなくなった(辞職した)状態に移行するというものであったが、実際には、部長でなくなった(辞職した)状態になりえるのは20年後であり、「部長でなくなっている」時点について、予想と実際の時間的前後関係は(91)と同じである。ゆえに、同様に移行が遅いという心理を表す。

(92) 健二はまだ部長だ。



以下も同様に説明される。

(93) 早く大学を卒業したいが、僕はまだ2年生だ。

(94) ストープに当たっているが、指がまだ冷たい。

(95) 早く雪だるまを作りたいけれど、まだ雪がバケツの半分しかない。

(96) 水筒を軽くして持って帰りたいのに、まだ水が半分もある。

(97) 30にもなるのに、まだ子供のように親元を出ない。

以上、4章からの説明をまとめると、モウ・マダの解釈の違いとその要因は以下のようになる。

	モウ		マダ	
	完了	心理	未完了	心理
発話時点	状態の移行直前か移行後		状態の移行前	
予想	なし	状態の移行後	なし	状態の移行後

7. まとめ

本論文ではモウとマダの意味と用法について考察し、新たな分析を示した。

まずモウとマダには状態の移行が前提としてあり、モウは状態の移行直前か移行後、マダは状態の移行前に発話時があることを確認した。

次にモウには完了、マダには未完了という基本的な意味があり、この場合、状態の移行が完了した、もしくは未完了である状態が示されているということを述べた。さらに完了・未完了の意味に加えて、状態の移行を早い・遅いと感ずる話し手の心理を反映する場合があるということを指摘した。この場合、話し手は状態の変化が起こる時点を予想していることが不可欠で、自らの予想と実際に変化が起こる（起こりうる）時点とを比べているため、早い・遅いという心理を示す解釈が生じるということが明らかになった。

最後に、本論文で扱えなかったタイプの例文を列挙しておく。

(98) a. 鉛筆をもう一本ください。

b. もうちょっとで死ぬところだった。

c. もう二度とマラソンには出たくない。

(99) a. もうお手上げだ。

b. もういやだ。

(100) あの子はもう、本当にかわいいんだから。

(101) あの点数ならまだまだだよ、僕なんか0点だったんだから。

本論文では、モウが(98)のような数量詞と一緒に使われる例は、モウが単独で述語にかかる場合と分けて考えたため、今回は考察することができなかった。また、(99)のような後ろに否定的な意味を伴う文、(100)のような感嘆詞の例、また、マダに関しては(101)のような例は時間の制約上、考察の対象外とした。今後、これらの文に現れるモウ・マダについても記述と分析を行い、より包括的に現象を扱えるようなモウ・マダの説明を追究したい。

参考文献

- ・飛田良文・浅田秀子（1994）『現代副詞用法辞典』東京：東京堂出版。
- ・池田英喜（1999）「「もう」と「まだ」－状態の移行を前提とする2つの副詞－」『阪大日本語研究』11: 19-35.
- ・池田英喜（2000）「状態の移行前を表す「もう／まだ」について」『阪大日本語研究』12: 49-56.
- ・庵功雄・松岡弘（編）（2000）『初級を教える人のための日本語文法ハンドブック』東京：株式会社スリーエーネットワーク。
- ・仁田義雄・日本語記述研究会（編）（2007）『現代日本語文法』第3巻。東京：くろしお出版。
- ・三枝令子（1986）「「もう・まだ」についての一考察（誤用研究中間報告）」『筑波大学留学生教育センター日本語論集』2: 51-56.

謝辞

本論文を執筆するに当たり、多くの方にご支援をいただきました。心より感謝申し上げます。担当の上山先生は、1年にわたり論文を指導していただき、論文の方向性に迷ったときには的確なアドバイスをくださいました。そしてミーティングを重ね、多くのことを教えてくださった王さん、市原さんにも感謝しております。王さんはどうやって卒論に取り組んだらよいか分からなかった私に一から論文について教えていただき、いろいろな視点から意見を出してくださいました。市原さんはいつも優しく私の意見を聞いていただき、最終日まで長い時間をかけて何度も添削をしていただきました。本当にありがとうございました。